

Meeting Report



第14回日本臨床腫瘍学会学術集会

2016 the Japanese Society of Medical Oncology Annual Meeting

会期：2016年7月28～30日

会場：神戸国際展示場・神戸国際会議場(神戸)

加藤 俊介

順天堂大学大学院医学研究科臨床腫瘍学教授

2016年7月28～30日の3日間、神戸大学大学院医学研究科内科学講座腫瘍・血液内科学分野教授 南博信会長のもと第14回日本臨床腫瘍学会学術集会が神戸国際展示場・神戸国際会議場において開催された(写真)。本学術集会は年々参加者が増加しているが、2016年の参加者は6,100名を超え、過去最高となった。

本会のテーマは「Breaking Through the Barriers: Optimizing Outcomes by Integration and Interaction」であり、実際に、臓器・領域の壁を越えた横断的な企画を中心としたプログラム構成が行われていた。特に横断的なプログラムの意味合いにおいては、最近注目されている免疫チェックポイント阻害薬など免疫に関連するセッションが大変多く、特別講演2演題、教育講演3演題、インターナショナルシンポジウム3演題、パネルディスカッション1演題、米国臨床腫瘍学会(ASCO)・日本臨床腫瘍学会(JSMO)合同シンポジウム1演題と、ほぼ連日切れ目なく免疫関連プログラムが開催されていたのが印象的であった。

1日目のインターナショナルシンポジウム1では、「Immune Check Point Inhibitor: Paradigm Shift of Cancer Treatment」のタイトルで、悪性黒色腫、肺がん、腎がん

に対する免疫チェックポイント阻害薬の臨床試験の結果についての講演が海外演者を交えて行われた。NYU Langone Medical CenterのJeffrey S. Weber先生からは、悪性黒色腫に対する抗programmed death-1(PD-1)抗体、抗細胞傷害性Tリンパ球抗原(cytotoxic T-lymphocyte antigen: CTLA)-4抗体を用いた臨床試験結果のレビューに続いて抗PD-1抗体のバイオマーカーに関する発表があり、末梢血中の骨髄由来抑制細胞(myeloid-derived suppressor cell: MDSC)高値は予後不良マーカーであり、抗PD-1抗体の治療反応性を上げるために抗TRAIL-R2抗体による耐性克服を検証する試験について計画中であることが報告された。また、血中蛋白質の質量分析結果から予後との関連がある59の蛋白質を同定し、バイオマーカーとしての有用性を検証しているとのことであった。免疫チェックポイント阻害薬はさまざまながん腫での治療効果が期待されているものの、高額であることやこれまでの薬剤にはみられなかった重篤な有害事象が起りうることから、有用なバイオマーカーの確立が望まれており、今後の研究結果が期待される。また、イピリムマブ(I)とニボルマブ(N)の投与順による効果の違いを比較するCheckMate 064試験(全生存期間(OS)がI→NよりN→Iのほうが良好)についての研究結果が報告され、イピリムマブを先に投与するとニボルマブの効果に重要なT細胞の枯渇を招く可能性が提示された。

個々の患者のドライバー遺伝子を同定するためには、次世代シーケンサーの果たす役割は大きい。一般口演1-5の「分子・遺伝子診断」のセッションでは、国立がん研究センター東病院のSCRUM-Japan、近畿大学、京都大学で行われているターゲットシーケンスの取り組みについての報告があった。全国の各施設から得られた各種検体の遺伝子変異プロファイルデータは、日本人の悪性腫瘍の貴重な「変異カタログ」である。今後、ゲノム医療を実現していくためには、臨床情報を含めたこれら情報の集約化が欠かせない。実際には検体採取方法や解析機器などの違いが存在し、得られたデータの品質管理精度の問題点も存在するため、その実現は容易ではないかもしれないが、特に機能意義が不明な変異が得られた患者の前向きな情報収集と



写真 学会会場となった神戸国際展示場の入口